

私の専門分野は、経済学史と制度経済学です。

経済学部では、経済学史と制度経済学の両方を担当しています。

大学院では、経済学史を担当しています。

それぞれどのような分野なのか、紙幅の限りで簡単に説明してみたいと思います。

経済学史 (History of Economic Thought)

経済学史はときどき経済史と混同されてしまいましたが、基本的には別物です。経済学史は、経済そのものというよりも経済学の歴史を扱うので、経済思想・経済理論・経済政策が主な研究対象となります。そもそも経済学とは何か、経済学がどのような社会的背景からどのように形成されてきたのか、経済学が果たす社会的役割とは何か、何であるべきか。このようなことを考えて研究しています。

歴史は過去のことだから、現在や将来を生きるわれわれにとって役に立たないと思われがちです。しかし、そうではまったくくないでしょう。とくに混迷の時代と見て取れる現在、将来の指針を得るのに過去からの道筋から得るものは多く、自由な思考のために先人の多様なアイデアから学ぶべきところは多々あります。有名なスミス、マルクス、ケインズのほかにも魅力的な経済学者がたくさんいます。

私自身は、スウェーデンの経済学者で 1974 年に「ノーベル経済学賞」を受賞したグンナー・ミュルダール (Gunnar Myrdal: 1898-1987) の経済学説の研究に最も力を入れてきました。スウェーデン福祉国家の思想的基礎を築いた重要人物であり、独特な経済学を展開した人です。彼の学説やスウェーデン社会を研究することにより、経済と福祉の関係性に対する自分の視点をもつことができました。

制度経済学 (Institutional Economics)

制度経済学は、「制度」を重視する経済学です。「制度」は、経済だけでなく政治や社会や文化や歴史などとも密接にかかわります。したがって、制度経済学は、経済を普遍的で孤立した問題領域と捉えずに、特殊で周囲の政治的・社会的環境とともに変容するものとする分野です。経済の歴史的変化と地域間の差異に積極的に目を向けます。

本学経済学部の授業では、長らく「制度経済学Ⅰ」・「制度経済学Ⅱ」、また学科応用展開科目として「比較経済システム論」という科目があり、私は後者 2 つを担当していましたが、それらは平成 30 年度から「制度経済学」として統合されました。このような経緯から、私の「制度経済学」には以前の 2 つの授業の内容が入り、20 世紀の経済社会の成り立ちと特徴の説明、また各国別差異について経済学からだけでなく政治学や社会学からもアプローチされている「資本主義の多様性」研究の成果紹介を含むものとなっています。

2019 年 (平成 31 年) 4 月 1 日

藤田菜々子